



親鸞ルネサンス ㊦

他力に生きる～東大話法を超えて～

東京大学で今、『親鸞ルネサンス』という研究プロジェクトが行われています。主宰は東京大学・東洋文化研究所の安富歩氏。なぜ今「親鸞ルネサンス」なのか。安富氏の目に映る現代社会についてうかがいました。



東京大学・東洋文化研究所教授 安富 歩

「東大話法」の闇

福島第一原発事故後、マスコミ

に登場してきた「専門家」たちの

言説がどうにもおかしいと私は思

い続けていました。どこまでも欺

瞞^{まん}的で、どこまでも傍観者ぶった

ものの言い方。彼らの話法を整理

していくと、どうも私が勤めてい

る東京大学の界限には、同じ話法

を実に巧みに駆使する人びとがと

ても多いことに気がつきました。

私はそれを「東大話法」と名付け

たのです。誤解されがちなのです

が、これは東大を批判しているも

のではありません。象徴的に「東

大」と名付けましたが、日本社会

全般に蔓延しているものであり、

やすとみ・あゆむ

【プロフィール】

1963年生 '86 京都大学経済学部卒。'86 株式会社住友銀行（～'88年）。'91 京都大学大学院経済学研究科修士課程修了などを経て、'97年に博士（経済学）を取得。'96～'97 ロンドン大学政治経済学校の滞在研究者。'97年に名古屋大学情報文化学部助教授。2000年に東京大学へ。2009年4月より現職。

著書：『満洲国の金融』『貨幣の複雑性』創文社、『生きる技法』『原発危機と「東大話法」』明石書店、『経済学の船出』『もう「東大話法」にはだまされない』『超訳 論語』『合理的な神秘主義～生きるための思想史』etc.

さらには文化や時代を超えた全人類的な普遍性も持っていると思います。

その意味で私は、親鸞聖人が当時の比叡山に対して下した批判と東大話法批判は全く同じものだと思います。表面的に素晴らしいことをやっているが、裏では真反対のことをし、そのことに本人は無自覚のまま正当性を強く主張する状況への批判です。どちらにも通底しているのは、責任を回避したい、状況を引き受けたくないという無責任性です。

人間は、自分の中に湧き上がってくる意志や感情を押さえ込むと、立場にたった行動ができるようになります。次にはそれを正当化しなければなりません。ここから東大話法が生まれます。自分の利益のためにではなく、立場のためにやっているの、何の罪悪感もありません。これは究極の無責任なのですが、東大話法を使うことで責任を全うした気になってしまふのです。

選択という

まやかし

東大話法が生まれた背景には、現代の特に日本における「選択」という概念をめぐる混乱があると考えられます。

この20年ほどの間に、日本では選択という言葉が急速に力を持つようになりました。人間は誰もが独立自立的な個人で、選択の自由を持っており、その結果の責任を全て負う義務がある、という考え方です。しかし人間の限られた能力で「正しい」選択など不可能であり、ましてやその全責任などとれるものではありません。日本社会では長く、もの皆互いに関係しあいながら、常に影響を相互に与え続けているという縁起観のもとで現実世界を認識し、その理屈を越えた不可思議さをそのまま受け取ることが智慧だという、暗黙の了解がありました。それが現在は理屈がすべてになってしまいました。現代は、自由とは選択肢が多いことだと考えられています。しかしそれはまやかしです。

「東大話法」

1. 自分の信念ではなく、自分の立場に合わせた思考を採用する
2. 自分の立場の都合のよいように相手の話を解釈する
3. 都合の悪いことは無視し、都合のよいことだけ返事をする
4. 都合のよいことがない場合には、関係のない話をしてお茶を濁す
5. どんなにいい加減でつじつまの合わないことでも自信満々で話す
6. 自分の問題を隠すために、同種の問題を持つ人を、力いっぱい批判する
7. その場で自分が立派な人だと思われることを言う
8. 自分を傍観者と見なし、発言者を分類してレッテル貼りし、実体化して属性を勝手に設定し、解説する
9. 「誤解を恐れずに言えば」と言って、ウソをつく
10. スケープゴートを侮辱することで、読者や聞き手を恫喝し、迎合的な態度をとらせる
11. 相手の知識が自分より低いと見たら、なりふり構わず、自信満々で難しそうな概念を持ち出す
12. 自分の議論を「公平」だと無根拠に断言する
13. 自分の立場に沿って、都合のよい話を集める
14. 羊頭狗肉
15. わけのわからない見せかけの自己批判によって、誠実さを演出する
16. わけのわからない理屈を使って相手をケムに巻き、自分の主張を正当化する
17. ああでもない、こうでもない、と自分がいろいろ知っていることを並べて、賢いところを見せる
18. ああでもない、こうでもない、と引つ張っておいて、自分の言いたいところへ突然落とす
19. 全体のバランスを考えて発言する
20. 「もし○○であるとしたら、お詫びします」と言って、謝罪したフリで切り抜ける



作家のミヒヤエル・エンデに『自由の牢獄』という短編作品があります。ある男が悪魔によって、謎の部屋に閉じこめられます。そこにあるのは111の扉。どれを選んでも自由だ、と言われながら、それぞれの扉の向こうには何があるかは明かされません。そして選べるのはただ1回ただ1つだけ。男はどれも選ぶことはできなくなっていました。

自由を与えられているのに息が詰まる。責任をとらなくてはいいけない。でもとれない。だから正当性の衣をまとうて責任回避をする。多くの選択肢がある現代社会の苦悩は、生活から仏教、特にその中の縁起観を消してしまったところに根源があるように思えてなりません。

自力とは自己規定

親鸞聖人が尊敬された龍樹という方の『中論』にこんな一節があります。「あなたは、馬に乗っているのに、その馬を忘れてしまっている」。馬が私を乗せて運んでくれたので疲れずに目的地に到着できたのに、そのおかげを忘れてしまっているという意味でしょうか。この馬とは、縁起であり、他力であり、阿弥陀如来です。縁起の世界に生きていながら、あるいは阿弥陀如来の本願に乗っていないが、そのことを忘れて独立しているつもりでいる。それによって自ら孤立し、不安になって立場を

固守しようと迷妄に沈んでいるのが現代人ではないでしょうか。それはまさに自力の世界です。

東大話法からの脱出は、浄土真宗的に言えば、自力を離れることです。具体的に言つと、「自分は〇〇である」という問題設定、立場主義から離れることです。先の〇〇には何を入れても一緒です。

「専門家」も、「金持ち」も、「心豊か」も、さらには、「他力に生きるべきだ」という決めつけもダメなんです。私は〇〇であろう、と自己規定することが自力に他なりません。

全てに責任を負える

幸せに生きるとは、自分に起こるさまざまな出来事をきちんと丁寧に受け止められるということだと思えます。それが他力に生きるということなんです。「流れにまかせる」事とは違います。自分にとって都合の悪いことに遭遇した時、それをどう受け止めるか。普通の

西欧的言語体系では、「不幸」とか「試練」として捉えるしかありません。しかし親鸞聖人の教えからは、楽しみ、とまでは言わなくても、「方便」として、「導き」として捉えることができるのです。実際にはなかなかできませんが、方向性としてそう捉えることはできるでしょう。

責任を独立自立した個として担うのではなく、縁起の中に生きる身として、つながっている全てに責任を負う。それはすなわち、縁起全体を支えている阿弥陀如来に身を任せることであり、宇宙のあらゆるところに慈悲が充満していることへの気づきにもなります。我が身我が立場にとらわれて迷妄を続ける現代社会の解放に、他力の思想はこれからますます重要性を増してくるに違いありません。

(文責 編集委員・松本智重)